

---

# その歌を

うわの空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その歌を

### 【Nコード】

N2856Y

### 【作者名】

うわの空

### 【あらすじ】

独りで生きていくために、身体を売り続ける『私』。

そんな彼女の腕を掴んだのは、見覚えのない青年だった。

「俺は覚えてるよ。君のことも、約束のことも」

少しずつ変わっていく彼女と、いつまでも変わらない彼の物語。

泣いていた私のために、彼がうたってくれたあの歌を。  
ずっとうたい続けてくれた、その歌を。

私は。

大きく息を吸い込んでから、私はゆっくりとうたいはじめた。  
私の声は彼よりも高いし、うたうのが特別上手いというわけでもないけれど。

私はうたう。

耳に残っている彼の声に、今は聞こえない彼の声に、合わせるようにして。

「君が笑ってくれるから、僕はうたうんだ。君の姿が見えなくても、ずっと、ずっと。僕は今日もうたい続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

彼のために、私は今日もその歌を、うたう。

夜の繁華街は眩しくて、冷たい。

たくさんの人がいるはずなのに、たくさんの人が笑ってるはずなのに、なんでこんなにも空っぽな感じがするんだろう。

私は電灯の下にひっそりと立って、息を殺していた。

誰にも見つからないように。

そして、誰かに見つけてもらえるように。

「君、終電逃しちゃったの？」

酒臭い親父が声をかけてきて、内心で私は笑った。今日はハズレだな、と思う。禿頭はげあたまに視線をやらないように注意しながら、私はほほ笑んだ。

私が終電を逃したのかどうかなんて、こいつは心配してない。こいつが心配してるのは、『私の身体の値段』だ。

「……おじさん、ホテル代頂けませんか？ できれば朝ご飯のお金もくれると嬉しいんですけど」

ラブホテル一泊分、プラス千円程度。

それが私の値段だ。

汚い私の身体なんて、このくらいの安さでちょうどいい。

お金を頂けませんか？ と言われて、はいそうですかとタダで金をくれる男なんていない。それはもはや暗黙の了解で、向こうは嬉

しそつにうなずいた。

「分かった。じゃあ行くこうか」

私は頷いて、相手の手を握る。……手汗が酷い。そしてやっぱり酒臭い。本当に今日はハズレを引いたなと、内心で苦笑した。

妻が待つてるからと言い残して、禿頭はそそくさと帰っていった。しかし、やることだけはちゃんとやっていくんだな、愛しの妻が待つてるくせに。

私は鼻で笑つてから、シャワーを浴びるためにベッドから立ち上がった。全身に禿頭の息がかかっているみたいで、気持ち悪かった。

身体を売ってるのは、そういう行為が好きだから。というわけではない。私はむしろ、男もセックスも大嫌いだった。売れるものがあるから売っているだけで、好きこのんでやっているわけではない。しかし、そこら辺を結構勘違いされやすい。こっちがちよつと嬌声をあげただけで、男は色々と勘違いする。……ビジネスだから相手が喜びそうなことをやっているだけで、こっちは気持ちいいだなんて思っていないのに。

間抜けな奴らだと思いつながら、私はシャワーの栓をひねった。

十五の時に家を出てから約四年。その間、ずっと変わらないこのスタイル。我ながら、よく続けているなあとと思う。たまに羽振りのいい客が万札を落として行ってくれるので、そういう時は安い漫画喫茶なんかで寝泊まりする。金がなくなれば、やる。そうやって今日まで一人で生き延びてきた。きつと、これからも。

私はシャワーを浴び終わると、禿頭がテーブルの上に置いていた金を確認した。

……五百円。

「遠足のおやつか」

私は笑った。いろんな意味で最悪の客だった。

翌朝、ファーストフード店で腹ごしらえすると、私は駅前に向かって歩き始めた。今日は常連客と会う約束の日だ。一見真面目なサラリーマンに見える七三分けのおじさんは、服を買ってくれたり小遣いを多めにくれたり、かなり羽振りが良かった。多分、どこかの偉いさんなんだろうと思う。まあ、相手がどんな仕事をしていようが私には関係ない。固定客はあまり作りたくなかったけれど、太っ腹なおじさんは大歓迎だった。会うのは二週間に一回程度だから、あまり負担にもならないし。

……ただ、相手の性癖がちょっとアレなだけで。

「あ、待って！」

「え？」

後ろからいきなり腕を掴まれて、私は振り返った。背後にはギタ<sup>そく</sup>ーらしきものを背負った若者……というか、私と同年くらいの男

が立っていた。身長は百七十五センチほど。短い黒髪は、あちこちにはねている。肌は白く、若干垂れ目で鼻が高い。

……地味にモテそうな顔だ。ただし、『地味に』。

「……なに？」

相手が敬語ではなかったので、私もため口で返す。男の恰好は、安物っぽい七分袖のデニムシャツに、これまた安っぽいベージュのズボン。つまり彼は、金とはあまり縁がなさそうだった。

「よかった、やっと会えた。探してたんだ」

「探してた？ 私を？」

「最近、ここら辺にいただろ」

人違いじゃないの？ と言いたいのを堪えて、私は彼の顔をじろじろと見た。やっぱり見覚えがない。彼を相手に『商売』をしたことがあったのだろうか。だとしたら、地味すぎて覚えていないのかもしれない。彼には悪いが。

黙りこくる私に気を遣っているのか、彼は爽やかな笑顔を無料で振りまいてくれている。しかしやはり、覚えがないものは思い出せない。私はため息をついた。

「……あー」

「コーヒー飲まない？ おいしい店、知ってるんだけど」

誘っているのかなんなのか、いまいちよく分からない。私は彼の黒い瞳を見据えて、言い放った。

「悪いけど、これから人と会う約束があるから。なんなら予約してくれてもいいよ。夜は空いてる」

「じゃ、夜に会ってくれる？」

「コーヒーに誘ってきた時と変わらない表情で、彼は嬉しそうに言った。彼の笑顔は無邪気で、下心を感じない。シタユコロ私を予約するという意味を、分かっているんだろうか。」

「……待ち合わせ場所は？」

「予約してくれてもいいよと言ってしまったことを後悔しながら、私はため息交じりに尋ねた。彼は私の言葉を聞くと自分の後ろを見て、

「この先に大きな公園があるの、知ってる？ タコ公園」

そこに遊びに行こうよとはしゃぐ子供のような顔で、言ってきた。大きな蛸たこの遊具が目印となっている公園を思い浮かべながら、私はうなずく。

「あの公園の真ん中に、大きな噴水があるだろ。そこに来てほしいんだけど。夕方六時くらいまでならいるから」

「分かった。じゃ、また後で」

とは言ったものの、面倒だと思った。今から少し疲れる仕事があるし、その仕事が終わったら、しばらく働かなくていいくらいのお金はもらえるはずだ。……こいつとの約束は無視してしまおうか。



そう思いつつ歩きだした私に、彼が叫んだ。

「君はもう、俺のこと忘れた？」

「え？」

私が振り返ると、先ほどと変わらない笑顔で彼がこちらを見ていた。

「俺は覚えてるよ。君のことも、約束のことも」

「約束？」

私が訊き終わる前に、彼は公園へと向かって走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2856y/>

---

その歌を

2011年11月7日12時05分発行